

## 二期会2014版『チャールダーシュの女王』の楽しみ方

貴族とキャバレーの歌姫の恋を描いた物語『チャールダーシュの女王』は、1915年の初演当時、同時代を舞台にした「現代劇」でした。今回は日本語による訳詞・新台本上演ですが、ドイツ語による初演時のオリジナル台本はオーストリアやドイツの劇場関係者に聞いてもついに入手することが出来ませんでした。ですが、逆に言えばそれだけ上演する国や劇場によって独自の『チャールダーシュの女王』が愛されてきた、ということでもあります。今回の二期会2014版は、入手できた上演台本、つまり代表的なウィーン・フォルクスオパー版、英語版といくつかの映像・録音を参照しながらも、今回は楽譜に準じて書き上げていきました。版によってキャラクター設定、曲順、さらには物語の意味や歌う人さえも違ってくる『チャールダーシュの女王』。音楽事典やインターネットで調べても情報の少ないこの作品の鑑賞の一助になれば、と二期会2014版のあらすじをお話しさせていただきます。

物語はオリジナル設定のまま第一次世界大戦前夜、1914年のハンガリーとウィーンです。ブダペストの歓楽街にあるキャバレー劇場「オルフェウム」の歌姫シルヴァ・ヴァレスクが二ヶ月に及ぶアメリカ公演に旅立つ前の「さよならコンサート」から舞台は始まります。20世紀初頭ですから飛行機ではなく船旅による大陸間の移動が主流の時代ですが、それでも船旅はもう命がけの時代ではありません。それに、たかだか二ヶ月の不在がこれほどまでに劇場の人々や聴衆を悲しませるのは何故でしょう…。

### ●前奏曲

観客の熱狂に何度も舞台へ呼び出されるシルヴァの姿を舞台裏からお見せします。疲労困憊のシルヴァですが、コーラスやダンサーが場を繋ぎながらも、何度も観客の声援に応えます。舞台裏には、劇場支配人、パトロン、衣裳さん、メイクさん、舞台監督やカーテンの開閉係、記者の姿も見えます。

### ● 1番 「ハイア、ハイア！私の故郷は山の中！」

(シルヴァ、ボニ、フェリ、合唱、ダンサー)

シルヴァは8回目のアンコールに応えようと舞台へ出ていこうとしますが、め

まいで倒れ、舞台監督が幕を閉じてしまいます。客席からは心配したフェリとボニが舞台裏にやって来て、シルヴァを気遣いながら客席に語りかけながら時間を繋ぎ、シルヴァの回復を待つて8回目のアンコールとなります。ハンガリーの郷土愛に満ちたこの曲を、シルヴァは最初はしつとりと歌いながら、次第に熱狂し、ダンサーたち、コーラスも巻き込んで歌姫のさよならコンサートにふさわしい盛り上がりを見せます。

そして、シルヴァが別れの挨拶をします。

「これほど素敵なお客様に愛していただき、私は幸せ者です。そしてそのことが、皆様へ、さよならを言うことを辛くさせます。皆さまどうか、私のことを忘れないでください。2ヶ月してアメリカから帰国したら、真っ先にここに駆けつけます。我が愛するオルフェウムへ。」

…喝采する一同ですが、どこか寂しげなシルヴァがたくさんの花束を手に舞台を去ります。

シルヴァが去った後、フェリの仕切りでシルヴァを驚かそうとパーティーの準備を始めます。ブダペストからシルヴァがいなくなることを嘆く二人ですが、フェリはシルヴァの渡米に何かを感じている様子。フェリはエドウィン父親であるレオポルト・マリア公爵からエドウィン宛ての電報を預かっていることをボニに伝えます。シルヴァは渡米し、エドウィンはウィーンに帰ってくるように催促が来ている…。二人の身分違いの恋によって、これまでの楽しい日々の終わりが近づいていることを感じるフェリとボニ。ボニは、フェリに「恋を楽しむ秘訣を教えてあげてよ！」…と頼み、二人で貴族の恋愛観を歌い上げます。

## ● 2番 「我らはみんなならず者～歌い手の若い娘たちは」

(フェリ、ボニ、8人の男性合唱、4人の男性ダンサー)

ステージで「さよならパーティー」の出し物の練習をしていた12人を巻き込んで、フェリとボニが「気楽に恋を楽しもう！」と歌い、踊る、トップ・ハット、ケーンを使った男だけのショーナンバーです。

そして、場面は変わってシルヴァの楽屋前。

コンサートが終了した静かな劇場を、シルヴァの恋人、エドウィンがやって来ます。劇場案内係に呼び止められますが、シルヴァに自分の名前を告げれば通してくれるはず、と答えます。案内係に導かれ、エドウィンはシルヴァの楽屋に通されます。急なアメリカ行きを咎めるエドウィンに、シルヴァは「今夜は二人で過ごす最後の晩よ。笑顔でお別れしましょう。」と答えます。お互いに愛し合っているのに別れなければならない二人。シルヴァは、その理由をこのように述べます。

「…私たちは、決して結ばれることがない。本物の王族と、名前だけの女王、チャールダーシュの女王の恋。…よくある貴族と芸人の恋の物語…違う？ハッピーエンドを迎えるのは、小説の中でだけ。」

エドウィンは策のないままに、変わらぬ愛を訴え続けます。

### ● 3番 「シルヴァ、僕が欲しいのは君だけなのだ」

(エドウィン、シルヴァ)

シルヴァは既にアメリカ行きの決意を決めて、トランクに荷物をつめています。エドウィンの熱烈な言葉にも、シルヴァは別れの決意が固く、エドウィンに別れのキスをします。

するとそこに、シルヴァをパーティーへ連れ行こうとするフェリとボニがシャンパンを持って現れます。エドウィンがいることに驚く二人。エドウィンは二人からもシルヴァにアメリカ行きを諦めるよう頼みますが、シルヴァの意思は変わりません。

「私が決めたの、私の意思で。アメリカへ歌いに行く。チャールダーシュの女王から、ブロードウェイの女王へ。自分の人生は自分で選ぶわ、人から決められるのではなく。」

その決意を受けて、フェリが言います、「四人が揃うオルフェウムでの最後の晩だ、四人だけでお別れの乾杯をしよう。他の奴らに涙を見られたくないからな。」ですが、シルヴァは残りの時間を楽しく過ごして、それで時間になったらお別れ…と言います。

### ● 5番 「遠くに行っても幸せは見つからない」

(シルヴァ、エドウィン、ボニ、フェリ)

『チャールダーシュの女王』には様々な版がある中、指揮者の三ツ橋敬子さんと出来るだけ楽譜から物語を書き起こしましょうとお話ししたのですが、楽屋の場面の歌である3，5番の間に舞台での4番が挟まることは舞台としては煩雑になるのでここだけは順番を変えさせてもらい、5番の後に4番を演奏することになりました。

この曲では4人それぞれの恋愛観が語られますが、恋ではなく愛を求め、未来のない恋に落ち込むことを良しとしないシルヴァの決意が揺るぐことはありません。フェリが気を利かせてエドウィンとシルヴァを残し、立ち去ります。

楽屋を出たフェリとボニを待っていたのはエドウィンの従兄、オイゲン男爵、陸軍中尉でした。思いもしないところでオイゲンと出会ったボニは動揺しながらも来訪の理由を尋ねます。オイゲンはエドウィンの父、レオポルト＝マリア公爵に頼まれ、エドウィンウィーンに連れ戻しに来たのです。そこにシルヴァとの最後の別れを終えたエドウィンもやってきて、オイゲンはエドウィンに召集令状を見せます。

「本部への出頭命令だ。軍の訓練に参加しないとならない。お父上もお待ちだ。」実際はシルヴァとの恋愛話を心配した公爵が、従妹のシュターズィとの結婚話を進めるためにウィーンに呼び戻す口実なのですが。急な結婚話に驚くエドウィンにオイゲンは印刷された婚約通知を見せます。エドウィンはオイゲンから軍隊の訓練はせいぜい2ヶ月と聞き出すと、何かを思いつき急ぎ出ていきます。

車で待つようにいわれたオイゲンですがそのまま舞台へ行くと、そこではボニが女の子たちとシルヴァに捧げる踊りのリハーサルを見ているところでした。オイゲンがボニにエドウィンの帰国のことを告げ、シュターズィとの婚約の話をする。「シュターズィはまだ小さかったことに会ったことがある」といいます。シルヴァのことを心配するボニですが、オイゲンは「お父上がたっぷり手切れ金をだすよ。」と行って、立ち去ります。楽しい日々の終わりを感じたボニは、自分もこのような生活から足を洗うときが来たのか、としんみりします。そこへリハーサル中の下着姿の女の子たちがやって来て、沈むボニに「キスして、ボニ！」と言い寄ります。果たしてボニの決意が揺るぐことはないのでしょうか…。

● 4番 「色恋沙汰はきっぱりやめ、ガールハントはもうしない」

(ボニ、8人の女性合唱、4人の女声ダンサー)

女遊びはもう終わりだ！と決意するボニに、女の子たちがあの手この手で今までのボニでいるように誘いかけます。4人のダンサーに8人のソプラの歌手が入り乱れてボニを誘惑したら、当然最後にはこうなります。

「そうだな、この世に女がいきゃ、全て終わりだ！」

そして、シルヴァのパーティーの準備へと一同は戻って行きます。

トランクに荷物を詰め終わって楽屋を出てきたシルヴァを、フェリが外で一人、待っていました。シルヴァの荷物を持つフェリの行き先は楽屋口ではなく、さよならパーティーが行われるオルフェウムの舞台へとシルヴァを連れて行きます。そこではお客も含めて全員がシルヴァを待ち構えていました。シルヴァのためにハンガリーのダンスを見せるダンサーたちや振る舞われるシャンパン…そんな時、エドウィンが突然舞台に現れます。

「皆さん、お聞きください。重大な発表をさせていただきたいのです。」

エドウィンはシルヴァのアメリカ行きのキャンセルを高らかに宣言します。アメリカの劇場との契約を主張するシルヴァにエドウィンは告げます。

「僕が君と新たな契約を交わす。僕と生涯結ばれる、結婚という契約を。」

● 6番 フィナーレ

(一幕出演者全員)

エドウィンは公証人を招き入れ、結婚誓約書を書かせます。シルヴァはそんなことは無理、といますが、エドウィンはヴェールもブーケも用意していて結婚式の真似事を始めます。シルヴァもエドウィンの真剣な様子に乗りかけますが、フェリがそこで警告を与えます。勢いだけで決めたのではないか？神にかけて一生添い遂げるのか？と。二人は、その場にいる皆の前で、変わらぬ気持ちを誓います。フェリもそれならば、と誓約を認め、二人は誓約書にサインをします。そして、フェリが音頭を取ります。

「それでは、皆さまにもご承認いただいたところで、メンデルスゾーンの結婚行進曲！…風の、結婚行進曲だ。」

結婚行進曲で盛り上がる一同の許へ、もう時間だ、とオイゲンがやって来ます。エドウィンはその場を去ろうとしますが、シルヴァはここで待っているから、とエドウィンを説得します。シルヴァを迎えに来ることを約束して立ち去るエドウィンと入れ替わりに、巨大な花束を持ってボニが入ってきます。しかし、一同はシルヴァがアメリカ行きを取りやめたことを知っており、ボニは戸惑います。その理由を知り、「エドウィン公爵夫人としてここに残る…そんなことは無理だ…」ボニは、エドウィンとシュターズィの婚約通知書を取り出します。シルヴァはそれを見て、現実気づきます。やはり私にはエドウィンとの結婚は無理…。

「あなたの言うとおり、アメリカに行くわ。私の歌声を、みなが待っている！  
喝采が、音楽が聞こえる！」

シルヴァは決然とその場を立ち去り、ボニも後を追います。

人々が去った後、一人残ったフェリが語ります。

「夜中の三時なんか、家に帰れるものか。『ヴァイラースハイム公爵夫妻は、息子エドウィンと、伯爵令嬢シュターズィの婚約を、ここに謹んで発表いたします。』…何のおもしろみもない、貴族同士のお決まりの組み合わせだ。」

舞台に一人たたずむフェリを残して、一幕の幕が降ります。